

## 四国山地東部の三嶺山麓におけるソウシチョウの営巣記録

佐藤重穂

Records of nests made by the Red-billed Leiothrix *Leiothrix lutea* on Mt. Sanrei, eastern Shikoku

SATO Shigeho

**Abstract** The author found two nests made by the Red-billed Leiothrix *Leiothrix lutea* (Timaliidae, Passeriformes), which was an introduced species to Japan, at Saorigahara on the foot of Mt. Sanrei, Kochi Prefecture. The nests, which were in the sasa bamboo shrubs, had been used in the breeding season in 2007. These are considered to be the first evidence of breeding of the Red-billed Leiothrix from Shikoku Island.

**Key words:** breeding record, introduced species, *Leiothrix lutea*, nest, Shikoku Island

### はじめに

外来生物の侵入は生態系にきわめて深刻な影響を及ぼし、生物多様性の保全上、もっとも大きな脅威である(村上, 2000; 日本生態学会, 2002)。鳥類についてもこれまで日本で多くの種が外来生物として侵入していて、日本鳥学会(2000)では26種が野外で繁殖する外来種として示されている。外来生物に対処するために、我が国では2005年に特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律が施行されたが、この法律に基づいて2008年2月現在、鳥類ではソウシチョウ *Leiothrix lutea* を含む4種が特定外来生物に指定されている。

ソウシチョウは中国南部から東南アジアを原産地とするチメドリ科の小鳥であり(de Schauensee, 1984; Collar and Robson, 2007)、日本では江戸時代から飼い鳥として輸入されてきたが、1980年代から本州、九州の各地の山地帯で野生化している(江口・天野, 1999; 天野, 2007)。四国で

は従来、単発的な観察記録が知られている(高知県保健環境部, 1995)のみで、定着していることを示す報告はなかったが、近年、徳島県・高知県境の剣山系において、生息が確認されるようになり(田中・佐藤, 2001; 東條, 2006)、愛媛県では2006年には石鎚山, 2007年には東赤石山で確認され(佐藤ら, 2007)、香川県でも2007年に綾川町で確認された(香川の野鳥を守る会, 2007)。しかし、これまで、四国からソウシチョウの繁殖の証拠を示す記録は報告されていない。

筆者はソウシチョウの確認記録が多い剣山系の三嶺山麓のさおりが原で、2007年にソウシチョウの巣を探索し、確認したので、報告する。

### 調査地と調査方法

調査地は高知県香美市物部のさおりが原である(Fig.1)。さおりが原は三嶺の南西山麓に位置し、標高約1,100~1,350mの緩傾斜地で、四国森林管理局高知中部森林管理署管内の西熊山国有林の一

部である。さおりが原の中央付近の緯度経度はおよそ北緯33度48分50秒，東経133度58分50秒であり，環境省による三次メッシュコードは5033-5778と5033-5788にまたがる。植生はブナ *Fagus crenata*，トチノキ *Aesculus tubinata* を主体とする落葉広葉樹にモミ *Abies firma* が混生する老齢天然林であり，林冠高は約25mである。林床にはスズダケ *Sasamorpha borealis* が優占するが，2000年代に入ってからこの地域でのニホンジカ *Cervus nippon* の生息密度が増加して，それに伴って2007年の時点でさおりが原の一部ではニホンジカの摂食により，スズダケが衰退していた。

この調査地に既設の登山道を利用して，1kmの調査コースを設けた。繁殖期のソウシチョウの生息密度を知るために，2007年6月5日の午前7時から9時の間にライントランセクト法による調査を2回行った。調査範囲は調査コースから両側各50m以内として，時速約2kmで歩行しながら，さえずり，地鳴き，目撃によって確認されたソウシチョウの個体数を数えた。

営巣場所の探索を2007年11月7日に行った。これはソウシチョウの繁殖時期が4月から10月に及び（東條一史，私信），探索によってソウシチョウをはじめとする鳥類の繁殖活動を妨げるのを避けるためである。設定した1kmの調査コースの両側各5m以内のスズダケや低木をかき分けて，巣の発見に努めた。巣の同定は柿澤・小海渡（1999）に従った。確認された巣は，地表からの高さを測定した後，採取して持ち帰り，巣の外側と内側の

それぞれの長径，短径，高さ（内側は深さ）を測定した。

### 結果と考察

2007年6月の生息密度調査で確認されたソウシチョウの個体数は1回目が6羽，2回目が11羽であったが，このうち，さえずり個体数は1回目が5羽，2回目が8羽であった。

2007年11月の巣の探索では，2つの巣が確認できた（以下，巣A，巣Bと呼ぶ）。2つの巣はいずれも十数本のスズダケの桿の地上1mあまりの部位にササの枯葉，苔，細根，樹皮などを用いてお椀型の構造が作られていた（Fig.2, 3）。巣の大きさはTable 1に示した。いずれの巣もササの枯れ葉でカップ状の外壁が作られ，その外側が苔や細根などでハンモック状の構造で覆われていた。巣Aではハンモックで苔の使用量が大きく，巣Bでは比較的少なかった。巣Bでは外壁にササの枯葉だけでなく，樹皮も使用されていた。いずれの巣もカップの内側には，細根や繊維状にした枯れ葉で産座が作られていた。

柿澤・小海渡（1999）はソウシチョウの巣の特徴を記述するとともに，似た巣を作る鳥はほかにいないとしている。今回，確認した2つの巣は，形状，材料，営巣場所から，柿澤・小海渡（1999）の記述と照合して，ソウシチョウの巣であると判断された。また，これらの巣を森林総合研究所鳥獣生態研究室に送付して，同研究室の東條一史主任研究員によって，ソウシチョウの巣で間違いないことを確認してもらった。東條（私信）によると毎年，筑波山でソウシチョウの巣をマークしているが，翌春までそのままの形で残っている巣はわずかである。今回の巣はいずれもお椀型の形状が保たれ，巣の中に落ち葉などがあまり入っていなかったことと併せて，これらの巣が2007年の繁殖期に作られたと考えられる。なお，巣A，Bとも，標本として森林総合研究所（茨城県つくば市）で保管している。

6月の生息密度調査におけるソウシチョウのさ

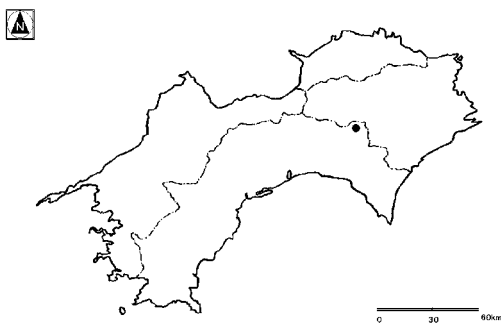


Fig. 1. Location of the study site, Saorigahara (●).

Table 1. Size and height of the nests of the Red-billed Leiothrix (mm)

	Diameter outside	Diameter inside	Vertical length	Depth of the cup	Height from the ground
Nest A	110×80	55×45	80	65	1300
Nest B	95×85	65×50	100	55	1250



Fig. 2. The nest (A) of the Red-billed Leiothrix observed at Saorigahara, Kami-shi, Kochi Prefecture.



Fig. 3. The nest (B) of the Red-billed Leiothrix observed at Saorigahara, Kami-shi, Kochi Prefecture.

えざり個体数は1 ha 当たり0.5ないし0.8羽であったが、これは確認されたすべての鳥類の種の中でもっとも高い密度を示した。巣は登山道の両側5 m以内の探索という条件はあるものの、1 haで2個が確認された。しかし、センサス回数の少ないこと、巣の探索範囲が狭いことから、えざり個体数の密度に比べて巣の密度が高いとは言えない。

今回確認された巣は、ソウシチョウが四国で繁殖したことを示す初めての確実な記録であると考えられる。

#### 謝 辞

本報をまとめるにあたり、森林総合研究所鳥獣生態研究室の東條一史主任研究員には、ソウシ

チョウの巣であることを確認していただくとともに、巣の特徴や形状についての表現をご教示いただいた。四国森林管理局には、管内の国有林への入林許可をいただいた。本報告の一部は2006年度のPRO NATURA FUNDの助成金により実施した。記して厚く感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 天野一葉．2007．外来鳥類の定着に影響する要因とソウシチョウの現状．生物科学，58：221-228．
- Collar, N. J. and C. Robson. 2007. Family Timaliidae (Babblers). In (del Hoyo, J., A. Elliott and D. A. Christie, eds.) Handbook of the Birds of the World. Vol. 12. Picathartes to Tits and Chickadees. pp. 70-291. Lynx Editions, Barcelona.
- 江口和洋・天野一葉．1999．移入鳥類の帰化．日本鳥学会誌，47：97-114．
- 香川の野鳥を守る会．2007．香川の野鳥事情⑬ついに外来種ソウシチョウ香川県で発見!!．こげら通信，2007年9月号：3-4．
- 柿澤亮三・小海渡銀次郎．1999．日本の野鳥 巣と卵図鑑．世界文化社，東京，238pp．
- 高知県保健環境部．1995．データベース高知県の野鳥（1986年～1993年）．高知県保健環境部自然保護課，高知市，444pp．
- 村上興正．2000．日本における外来種の法的規制．保全生態学研究，5：119-130．
- 日本鳥学会．2000．日本鳥類目録改訂第6版．日本鳥学会，帯広市，345pp．
- 日本生態学会（編）．2002．外来種ハンドブック．地人書館，東京，390pp．
- 佐藤重穂・濱田哲暁・山本貴仁．2007．四国地域におけるチメドリ科外来鳥類の定着実態の解明．四国外来鳥類研究会，高知市，34pp．
- de Schauensee, R. M. 1984. The birds of China. Oxford University Press, Oxford, 602pp.
- 田中正晴・佐藤重穂．2001．三嶺の鳥類．しるべん，(171)：3-6．
- 東條秀徳．2006．“相思鳥”が広がっています!!．野鳥徳島，(339)：7．
- （原稿受理 2008年3月31日）